

卓見 異見

東京農工大学
大学院教授
松下 博宣



まつした・ひろのぶ 81年(昭56) 早大商卒、
コーネル大院修了、米コンサルタント会社などを
経て97年ケアブレインズを創業しeラーニング事
業等を展開。07年に同社売却。東京農工大・産業
技術専攻で起業家・技術経営者の知見を伝える。

弱まる日本型共同体

世界各国に暮らす人々の内面の幸福度を測定し比較するデータベース(DB)として蘭エラスムス大学のワールド・データベース・オブ・ハピネスというものがある。「現在の生活にどの程度満足しているのか」という質問を10点満点で計量化したところ、日本は世界60位。金融危機のギリシャ(56位)や、お隣の中国(54位)よりも低い。主観的な生活満足度は先進国中最低レベルというのが日本の状況だ。

幸せ感じづらい日本人

一方、国連が実施する人間開発指数にも注目したい。これは人間

開発の三つの基本、つまり、健康で長生きできるかどうか、知識を得る機会があるかどうか、人間らしい生活を送れるかどうかについて測定する総合的な指標である。言ってみれば客観的な幸福度指標だ。2011年度の日本の人間開発指数はスイスに次いで12位だった。まずまずの結果だった。

世界と比べて幸福の外形的、客観的条件が整っているにもかかわらず、内面的、主観的な幸福度はかなり低い、というアンビバレンツさが日本人の幸福度の特徴だ。これが日本が実現してきたイノベーションの一つの結果だとしたら、望ましいものではないだろう。

98年以降、うつ病患者は急増して100万人以上に達している。自殺者は年間3万人以上で高止まりし、無縁死も同3万人以上いる。直接的には97年に集中した大手金融機関の破綻、大企業の倒産がトリガーになっている。

他国に見られない日本社会の特徴は、年功序列、長期安定雇用という人事雇用手法により、本来は機能組織である会社(役所も含む)を共同体化させたことである。ところが、自家業籠中の会社共同体が誇った社縁もイノベーション推進のために成果主義、雇用の短期

社会イノベーションのすすめ

化、人件費の変動費化、リストラの波にもまれ、弱まってきている。イノベーションという概念は社会・経済学者シュンペンターに淵源する。当初「新結合」と呼んでいたものをイノベーションと言いつつ、彼は「創造的破壊」こそ「資本主義についての本質的事実」だと喝破した。また「資本主義はその欠点のゆえに滅びる」と言ったマルクスの逆手を取り、彼は「資本主義はその成功により滅びる」と意味深長なことを書いている。

さて、以上のように地縁、血縁、社縁がじり貧になるにつれ、日本人にはワクワク感、ごきげん、元気が薄れてきている。さら

地縁、血縁、社縁の復興を

に起業率が廃業率を下回ったまま推移している日本は、起業後進国であり、起業家(企業家)が出現しづらい国となってしまった。また企業内起業家にとっても同調圧力が強い共同体組織の中では「出る杭」となってしまう疎まれることが多い。

資本主義の生命線であるイノベーションの担い手「企業家」が、サラリーマンへ移行するにしたがい、資本主義の行動様式を最も純粹に現す起業家精神は萎縮し、減退しつつあるのだ。

新たな担い手の胎動

地球埋蔵資源に付加価値を加え、技術を起点にして垂直統合を図り、成長と効率を金科玉条とし、市場競争で勝利し、株主に利益をもたらすことばかりを狙うイノベーションは隘路に陥っている。福島第一原子力発電所(産官・学・報の原発ムラ共同体)事故はその象徴である。いま日本に必要なものは、地縁、血縁、社縁を復興させるソーシャルなイノベーションである。

筆者らの調査によると、アントレプレナー(起業家)、イントレプレナー(社内起業家)、トランスプレナー(筆者の造語で組織間起業家)は、そうでない人たちと比べて①専門的能力もさることながら、ワクワク感、ごきげん感、元気感、それらが複合した主観的幸福感が強い②近年の新規起業の傾向は、旧来的な「ものづくり」ではなく、公共圏にまで浸透するサービスを併せ持つ「ものごとづくり」にシフトしてきている③資本主義が破壊・排他・排斥してきた地縁、血縁、社縁を復興させることを狙う「社会的起業」が増えていくことが分かった。資本主義が破壊してきた「縁」に生じているカオスの「縁」では、新しい社会構成原理の「縁」が胎動している。(今回は神奈川県知事の黒岩祐治氏です)